

Käthchen の上演と出版

—1810年2月～9月—

松 沢 芳 郎

1. Berlin 到着前後

現在の東 Berlin の Mauerstraße 53番地の Kleisthaus の入口の壁には次のような Denkmalsfelがある。

An dieser Stätte / wohnte der Dichter / Heinrich von Kleist / von Herbst des Jahres 1809 / bis zu seinem Tode / am 21. November 1811. / Seinem Andenken / die Stadt Berlin 1890.

しかし H. v. Kleist は1810年2月4日に「Potsdam より Berlin の Hotel du Prusse」(L342)に到着し、Mauerstraße 53番地に下宿を選び最後の Berlin 生活を始めている。1809年秋からこの時まで Frankfurt / O. や南独遊歴もあり果してここに下宿を決めていたかは確実ではない。

K より早く A. Müller が1809年春 Dresden から Berlin に、Altenstein 大臣によってひらかれたプロシヤの官途につく希望をもって戻ってきていた。さしせまった宮廷の Königsberg からの帰還、動揺した国の新秩序建設、大学の新設計画が Müller や他の多くの人々を首都へ引き寄せたのだった。そうした人々の中に思いがけず現われた男Kについて、その風変わりな点やその難解で骨の折れる仕事のことを Berlin の友人達は色々述べている。この場合の日時や前後関係はどうもはっきりしない。

Kが1810年 Berlin に着いた時「ヘルマン戦争」を完成して持っていたが、これは1809年のドイツの良くない状態をローマン主義的に映し出して、それに続く時代が彼にはメーレンの戦場で身近にいたく感じられて、彼の Hermann が国民にその時代からの打開策を示す筈だったのだ。

近くに住む Brentano とは暫くよそよそしい間柄だった。それに反して Arnim とはだんだん真の友情にと深くなっていった。Arnim は同じような生まれでKのように北ドイツ人でユンカーでプロテスタントだった。またある時は Berlin, ある時は Nennhausen (Rathenow付近)に住んでいた Fouqué との交際も復活し、ますますかたくなっていった。Arnim はこの頃 W. Grimm 宛にこう書いている、「この町には詩人がうようよしています。最近小生は、小生が Fouqué に敬意を表わしてもうけた中食会で30人と同席しました……彼[Fouqué]のあとにKが到着しました。非常に特異な、かなり狂気じみた性格で、古いプロシヤ生まれの才能が日夜働き続ける場合が殆んどそうであるような男でした。……彼の死については、貴兄がおよそ当地から受け取られたように真実ではなく、彼が軍事的任務をオースタリーでとろうということすら否定しており、彼の計画はただ文学雑誌をその地で作ろうというのだったという」(L347)。

Altenstein 大臣はKの変らぬ保護者だった。K, Arnim, Brentano, A. Müller にとっては、彼らに心を寄せる Stägemann のサロンが開かれていた。まだ Saalfeld に残っていた

L. Ferdinand 公の姉の夫 Radzivil 侯の邸宅は彼らの出入が自由だった、即ち Arnim は無名の自分を世に出してくれた守護神としての侯に Gräfin Dolores を献呈したし、K の Homburg 公子は Radzivil 侯の私設劇団で上演されるという榮譽を与えられた。別の貴族の集會点を v. Berg 家出で、Causewitz 夫人となった Marie Brühl 伯夫人の姉妹のような友の Voß 伯夫人のサロンが形成していた。Voß 伯夫人の母の v. Berg 夫人は Luise 王妃の有名な友達だった。K も v. Berg 夫人の保護を受けていた。彼女はそれで K が今あらためて Luise 王妃に推薦される場合の仲介の人となることになり、K は 1810 年 3 月 10 日に宮廷に出頭し王妃に詩を奉呈するのが許され、その詩は満廷の中で王妃の涙をさそった^①。宮廷の中の地位が K に用意される計画もあった。K の状態はこの一ヶ月ほどは幸福だったのである。K は姉に Berlin に来るようにと誘い、彼女が毎日 Altenstein の家に行けるだろうと書き、また v. Stägemann 宅にも案内すると約束した。そのように K には広い交際と好機が開かれていて、もう一度希望に満ちて将来をみつめてもよかったのである。

これより先 1810 年 2 月 23 日 K は Berlin で Wolfart 宅での茶と夕食会に出席しているが、それは Loeben 伯の日記 (L348) にのっている。また 3 月 13 日に行われた Liedertafel の発表会は「王妃の誕生祝」とされているが、この出席者の中には K の名もみられる。

2. Reuter との争い(経済的事情に関連して)

1810 年 1 月 K は「ただほんの暫く」Gotha の Schlotheim 宅を訪れる。P. Hoffmann も「何が彼をそこへ行かせたのか我々は判らない。おそらく金の工面だったのだろう」と述べている。1 月 28/29 日に Gotha から K は Collin 宅に手紙 (B157) を出しているから、おそらく K は v. Schlotheim 宅を訪問し、新聞を発行する資金を願ったのだろう。それに対して Schlotheim はおそらくその場では何も援助することが出来なかったが、Reuter への一種の貸金を思い出した。

①それ故 Schlotheim が 1806 年 7 月 28 日 Reuter に支払った Schwedisch-Pommern の地図の予約金は自分に不要だから K にゆずる。Reuter から K に渡してくれるようにと 2 月 18 日に手紙を書く (L349a)。②ところがこれには Reuter が何かに躊躇したらしくなかなか支払わない。4 月 18 日に K 自身は経済的にそれほど充分でないので持参人払いになっているから早く支払ってくれと Reuter に請求する (B161)。③しかし Reuter も余り良くない状態だったのかもしれない。それで色々故障を申し立て K に Schlotheim に対する反訴を送ったりしてなかなか支払わぬので、K はそうした理由立てにごろを煮やし、払わないなら Gotha の Schlotheim に交渉して確めてくれ、しかしそれでもとにかくその時「予約証を引き受けるのかそうでないのかどうかはっきり」するだけはしてくれと念を押す。④それで Reuter は 4 月 14 日付で Gotha の Schlotheim に手紙を出さねばならなかった。おそらく彼も K の激しい質問に態度を決めたのだろう。それで Schlotheim が Reuter に手紙を出しその理由を簡条書にして説明して (L349b) ゆき、「貴殿にはこの点から小生が全く私欲なく仕事に向かい、小生が貴殿に反対の非難をしていず、どうかこうにか公平を要求しているとお判りでしょう。Pommern の地図の出版に決められた時期が今は約四倍に延長されたので、小生が許すことのできない公平さは、貴殿が返済にどんなそれ以上の障害で邪魔することなく、小生にこれ以上の手紙を書くことで郵便料を支払わせないことを小生は要求致します。小生はそれ故これ以上お便りを口頭でお話するまでやめます。もし貴殿がおよろしければいつでも気持ちよくお出で下さい」と結んでいる。⑤こうした返事で K が Reuter に最後の手紙

を5月8日に書くことになる。「小生は Schlotheim 氏の手紙を一通お送りします、貴殿がそれによって決心されることをどうか小生にお知らせ下さい」(B164)と。Kと Reuter はそれ以上に交際することはなかった。

3. Käthchen の Wien での上演

1810年3月17日(土曜日)6時半より Wien の王立劇場 Schauspielhaus an der Wien で K の Käthchen が上演され19日まで続演された。プログラムには「本1810年3月17日土曜日 /k. k. pr. Schauspielhaus an der Wien で上演 /初演/ Das käthchen von Heilbronn/ 5幕の劇 /Heinrich von kleist 作 /配役…………… / 舞台は Schwaben /6時半開演」とある。

当時北ドイツでは劇場は戦乱とフランスの統治の結果全く振わなかった。それ故Kにとっては Dresden (1806年12月 Napoleon は Posen で Sachsen 選帝侯 Friedrich August と条約を結び Sachsen 侯は Rhein 同盟に加入した)や特に Wien の劇場を目指す以外に何も残されなかった。そして彼はこの二つの町に劇場と密接な関係のある友人達を持っていたため、より一層上演の可能性を期待することができた。1808年8月のKの姉 Ulrike の手紙 (B136)には「僕は今また作者を一つ当地の Maître de plaisir, Grf. Vizthum を通じて Sachsen の一流劇場に売りました、そして戦争が僕に邪魔しなければこれを Wien へも手渡そうと考えております、でも Berlin へは手渡しません、何故ならそこでは平凡なフランスの作品で上演されているからです。そして Kassel では全くドイツの芝居は中止されており、フランス物がとって代っております」とある。しかし当時 Dresden の劇場は1814年に国営に移されるまで個人経営であり、殆んど古典劇は上演されず、ただ凡庸な劇で一幕か二幕の喜劇が上演されていた。そしてまたこうした演し物は Dresden 劇場の俳優や作家志望の好事家をひきつけていた。全く Iffland や Kotzebue のものが多かった。そしてこの事は K. v. H. の上演には Dresden の劇場がまだ全然熟していなかったことを示しているのである。それ故Kには Wien の劇場のみが残されていたのである。

Wien での上演はKにとっては K. v. H. の創作に取りかかった最初からすであって作品の構想に際して Wien の観衆の好みや Wien の上演目録にいれられるという顧慮がなされていた。

1807年9月17日に「最近僕はオーストリー大使と Töplitz にいました、僕が沢山の人と知り合いになった Genz 宅です。——もし僕が Wien の劇場で監督の地位になれば、貴姉は何とおっしゃるでしょう」(B111)と書き、1807年10月25日(B114)に原稿を売って外国の舞台での上演で生計を立て、それがすでに 300Rthlr. に達した(オーストリー大使が 30Louisdor を Wien の劇場に調達した)と姉に伝えているように早くに Wien の劇場と関係を持っている。またその後9ヶ月経って Cotta 宛書簡(B135)に「袖珍本にきめてある戯曲 [K. v. H.] はWien で上演されるだろうと期待しております」と書いている。そして更に「……当分小生はそれでも閣下の興味が許す期限内に出版されるのを希望していました。それ故小生の満足するようお願いいたしますのは、ぎりぎり Michael 祭前の時点に決めることです、閣下が印刷のための原稿を入手されねばならぬので」と伝えているから Michael 祭以前に Wien で上演するのを願っていたことが判る。彼は上演による報酬を勿論期待していたのだった。

Wien で Hofsekretär, そして1809年以来 Hofrat der Kredithofkommission の職にあった H. J. v. Collin が Wien の劇場への道を開いてくれるとKは信じていた。Collin はその地

位の上からは勿論そうしたことは可能であり、Kは Collin にその点では信頼していたので作品を Wien の舞台向きに改作することを任せている、即ち「K.v.H. は小生自身のみても必然的に短縮されねばなりません、小生の心から任せられる貴兄以外の誰の手にも渡すことができません。どうか貴兄の劇場に向くよう存分に改作して下さい。それを上演する Berlin の舞台も短縮しております、そして小生自身も今後おそらく他の舞台のために同じような処置をとるでしょう」(B141)。この Collin 宛書簡(B145)には彼は王立劇場会計係への領収書を 300Gulden の銀行券の額で、しかも1809年4月にやっと Berlin に到着した(B149)報酬のために同封している。

この頃の仏独戦争勃発前にKは Collin から K.v.H. の配役が決められ、すぐ Wien の劇場で上演される筈だとの知らせを受け取っている(B156, B157)。そしてそれによれば Collin が舞台用に改作したことが知られるが、その改作はどのようなものであったかはうかがいしれない。

それなのに上演は、戦争勃発と Napoleon の1809年5月13日以後の Wien 占領を考えてみても判るように行われなかった。実に1809年はKの希望が果たされぬままに終わったのである。Kは非常に金に困り、また暫く上演を断念することにし、1810年1月12日(B156)に作品を Cotta で印刷するため送る決心をした。しかしながら Cotta は2月22日にその作品はその年には印刷できないと言うので、4月1日Kは原稿を送り返してくれと要求している。そうした間に Wien でまた上演のチャンスがめぐって来たのである。

K.v.H. は「3月17, 18, 19日 Wien の劇場で Napoleon の結婚式の間に初演されました。そしてそれ以来しばしば友人達が小生に伝えるところでは何度も上演されています」(B166)とK自身が伝えているが、この上演期日については初版本の表題にもあり間違いではない。しかしその理由については、Kが別の手紙でも「Wien 劇場で結婚式の際に上演された戯曲 K.v.H.」(B168)と書き、また Fouqué もその手紙を引用してKが「Wien でフランス皇帝の結婚式の日に喝采を博して上演された劇 K.v.H.」(L356a)と述べていて、あたかも1810年4月2日に行われた Napoleon の Maria Luise von Österreich との結婚式に関係あるかのように説明しているが、3月17日の K.v.H. の上演は決して結婚式のために催されたのではなかった。しかもKが BA にのせた「Fragment eines Schreiben aus Paris」にはこれとは違ってその祝典の日時を4月15日と誤って記述している。要するに「3月17日に Wien の王立劇場で初めてKの5幕の劇 k.v.H. が上演された」(L352)のであり、「Theater an der Wien で上演されるということがおこった」(L351b)のだが、この頃の Wien の劇場のそれぞれの大きさのため Burg Theater でなく、この劇場で上演されざるを得なかったのである。しかし「1810年冬の Wien についての論評」(L351a)で J.Kerner が述べているようにこの素晴らしい劇場が素晴らしい俳優をそなえていたにしても観客の嗜好そのものが低級であったため、低級な目的に誤用されざるをえず、今日みられるほどの効果を発揮しなかったのである。

Wien での上演作品の改作については演出台本がすでに残っていないのでただ憶測できるにすぎないし、改作者の名もはっきり Collin だとも言えない⁽²⁾。上演についての唯一の確実な資料となるのは芝居のプログラムと、二、三の批評だけである。プログラムの表現を初版本の題名や登場人物と比較することにより、まず作者の副題「oder die Feuerprobe」が欠けていることに始まり色々と考えられるが、Wien の脚本検閲にまず改作者が従わなければ

ならなかったことが判る。

Kが「貴殿にその評価をのせている筈の Nürnberg 新聞の論文をお見せします, der Moniteur (L356) や多くの雑誌や多くの新聞もそれについての報道をなしました。当地の新聞は同封の論説 (L354a) をのせました」(B166) と書いているように, K自身も K. v. H. の上演の批評を知っていたのだった。

上演そのものは一般的な意味で賞讃され, 批評家達は作品に対するそれぞれの判断を述べている。そして実際の上演では「Pedrillo が Käthchen-Gott を実に素晴らしく演じ, Gruner もうまく演じた。本当に勇敢に見えたのだった」(L351b) ようである。1810年3月22日にすでに K. v. H. の上演そのものについての批評が Der Sammler (Wien) の中に見られ劇の中にただ騎士物語がかなりまとまりのない骨組で表現されたと述べている (L352)。R. Stolze は「こうした見方は Wien 人が作者に対しての正しい見方をもっていなかったことを示している。また同じく Wien 人はKの文章上の表現法への正しい理解もしていなかった」と述べている。また3月28日の Wien の Österreichischer Beobachter (L353) も, K. v. H. を「力と統一のない作品」とよび, 詩人に自分自身に劇的素材を詩人として芸術と理解で空想の領域で完成するのが成功しなかったとの非難をあげている。また「Wien 劇場はKの5幕の劇 K. v. H. を上演した。Jungfrau v. Orleans をこせこせと忠実に模倣したにも拘らず, それが通常の騎士劇の中では全くのところ抜きんでており, 今年発表された新しい上演すべての中で(王立劇場の上演全体をひっくるめて) 第一等である。役者全体が非常に努力した。全ての, いやまた 最少限の力の共同作業はこの舞台でも絶えず結構な見物を適えている」(L355) という評も1810年 Wien で出ているし, 5月2日の Paris の Le Moniteur は Wien 発4月17日付で「2ヶ月来, 多くの新しい作品が上演されたし, そのうちいつもかなりの数の観客をひきつけるにも拘らず, それでも K. v. H., Rochus Pumpenickel, Familie Pumpenickel などのような多くのものは全然なっていない」と報じている。

また前述の「何度も上演されています」(B166) というKの表現は, 4月18日付 Morgenblatt の記事「Wien 発4月, 当地の劇場で最近たくさんニュースがみられました。Kの K. v. H. が色々と非難されて批評されていましたが, しかし見物はますます押しかけています。その劇は沢山筋があり, 舞台装置が充分使われていますので, 観客に不自由することは容易くおきないでしょう」(L354b) からもあり得たような感じもするが Stolze も説明しているようにKの生きている間はなかったと断言できよう。Stolze は Taschenbuch für Schauspieler und Schauspielfreunde für das Jahr 1816 を参照として言う, 「私の考えではこの申し立ては事実に基づかず出版者 Reimer に K. v. H. の出版引き受けを引き受けやすくするために, おそらく用いただけのようである。いずれにしろ作品が〔Graz と Bamberg の劇場で〕新たに上演された1814/15年のシーズン以前にはそれ以外のどんな上演もなかった。

註

- (1) Kが3月10日に Luise 王妃に捧げた詩「An die Königin von Preußen」は3つの原稿が残っている。というのは最初は寺院で荘厳な礼拝式が行われる予定だったが, 結局華美なことが廃止されるという風にお祝の計画が何度も変更された結果2度の改作が必要だったのである。それ故

最終的な形として立派なソネットが出来たのだった。これは飾りたてられた華美が取り払われている。

- (2) Collin がそれぞれの配役が割りあてられた舞台装置を作ったのだが、実際の上演の約1年前だった。その後彼の割りつけが話題にならなかったし、また Collin によって割りつけられた他の詩人の作品が Theater an der Wien の舞台にかけられたかどうかとも未知である。むしろ信じられうるのはこの劇場の主演俳優で監督であり、初演で Wetter v. Strahl 伯を演じた Franz Gruner が改作と演出を行ったという仮説を R. Kießling がなしている。Gruner は①大傑作の特色を捨てないこと、②称讃すべき王国検閲が不快に思うところ全てを取りのけること、③観客に気に入るものを全て省かぬことを注意しているという。

参 考 書

R. Steig: Kleists Berliner Kämpfe 1971².

H. Sembdner: H. v. Kleist in Urteil der Brüder Grimm.

Meyer-Benfey: Kleists Leben und Werke. 1911.

R. Samuel: H. v. Kleist und K. B. v. Altenstein, 1955.

P. Hoffmann: Kleist und Reuter. 1927.

R. Stolze: Kleists Käthchen v. Heilbronn auf der deutschen Bühne. Berlin 1923.